

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320189

研究課題名(和文) 民俗学的実践と市民社会 大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較

研究課題名(英文) Civil society and the practices of folkloristics: comparison between Japan and Germany of the social arrangement of universities, cultural policy, and civic activities

研究代表者

岩本 通弥 (Iwamoto, Michiya)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：60192506

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円、(間接経費) 4,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日独の民俗学的実践のあり方の相違を、市民社会との関連から把握することを旨とし、大学・文化行政・市民活動の3者の社会的布置に関して、比較研究を行った。観光資源化や国家ブランド化に供しやすい日本の民俗学的実践に対し、市民本位のガバナビリティが構築されたドイツにおける地域住民運動には、その基盤に「社会-文化」という観念が根深く息づいており、住民主体の文化運動を推進している実態が明確となった。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to understand differences between the practices of folkloristics in Japan and Germany from the viewpoint of their relation to civil society. Comparative research has been conducted regarding the social arrangement of universities, cultural policy, and civic movements. Folkloristic practices in Japan tend to be transformed into tourist resources or subjected to national branding easily. Regional civic movements in Germany are constructed around citizen-based governability, and it has become clear that at their foundation, cultural movements based on citizens' initiatives are propelled by deeply rooted and vital concepts of 'Socio-culture'.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：民俗学 日常 普通の人びと 社会 文化 歴史工房 国際情報交換 ドイツ：中国：韓国 エスニシ  
ティ

### 1. 研究開始当初の背景

2003年のUNESCO総会で採択された「無形遺産の保護に関する条約」(以下、無形遺産条約)の批准により、日本に限らず中国・韓国など東アジア諸国では、民俗学者の多くがリスト登載のための調査などに「動員」され、ローカルな民俗文化が審美化され、衰退する地方の地域おこしや少数民族の経済政策に、観光資源化として流用される事態が進行した。それは民俗学のあり様を根底から揺さぶる衝撃を今も与えているが、戦前、ナチスの文化政策に深く加担した猛省から、東アジアの学的状況とは異なる展開を遂げている現代ドイツ民俗学の実態解明に迫られた。

### 2. 研究の目的

本研究は、民俗文化に関するグローバル・スタンダードとして無形遺産条約が各国に受容され、ローカライズしてゆく局面において、観光資源化やナショナル・ブランド化に「動員」「回収」される傾向が顕著な、東アジアの民俗学状況と比し、その対極に位置するドイツの民俗学と市民運動的实践との関係性を実態調査する。グローバル化に伴って外部世界との交流が激化する中で、外部資本や外部の運動家に翻弄されがちな、地域社会における市民生活や民俗文化をいかに把握し、また住民主体のガバナビリティをいかに構築できるか、現代ドイツ民俗学を範に、その可能性を考究することを目的とした。

### 3. 研究の方法

アカデミック民俗学 = 大学研究機関と、博物館などの文化行政、郷土協会などの住民組織や市民運動との3者の関係性については、ハンブルクを中核調査地に設定し、フライブルグとミュンヘンを比較対照地としてフィールドワークを行った。文献研究による理論的制度的研究も組み合わせ、ドイツ3箇所とメンバー各人の蓄積してきた日中韓の実態と比較し、多面的な把握に努めた。

### 4. 研究成果

(1)戦前ナチスの文化政策(ゲルマン民族の精神/原形を農民/農村に求めた政治的フォークロリズム)と結託した学史的反省から、1970年前後に大転換を果たした現代ドイツ民俗学の研究枠組は、研究対象を「民俗」とはせず、Volkskunde(民衆の学問)の展開から「普通の人びと」の日常Alltagに移行させた。同根の「民衆学」から発展した、市民の希求する文化行政を自らのアソシエーション的活動に委ねる社会-文化Soziokulturという運動概念は、民主主義を基底的に構築していくシステムとなっている。ソーシャルなものを問い直す森の編著[2014]のほか、DVD日本語版の発行[岩本2013]も、その特質を具体的に把握するものであり、ハンブルク大学での民俗学教育の実相[及川2014]や、カッセル州の埋葬文化博物館[田村2013]を紹介するなど、ドイツの具体的事例の諸相を複数、成果化した。

(2)アカデミック民俗学と、科学的には対立しつつも協業する民間セクターの一つとして、1980年代初頭から活発化したハンブルクの歴史工房の活動は特筆される。17の市街区ごとに史料アーカイブや展示スペースを所持する、History Workshopの一種であり、住区の史料的アーカイブの収集や生活史的インタビューを通じて、例えば売春や薬物汚染のクリアランスに連動する故に、街づくりの主役にもなり得る。「野の学」として公民育成を志向した東アジア民俗学の再創造のヒントも示唆するが、ただし、住民自らの下からの歴史記述の試みの制度化ともいえる歴史工房は、法橋によれば、フライブルグなど南西ドイツ地域では存在していない。バーデン民俗学協会と地方福祉事業協会が1909年に合併した「ふるさとバーデン」や1931年創設のアレマン協会、またホッホブルク城郭保存協会といった多彩なフェアライン(Verein;協会)が近似して存在するが、街区毎ではない。民衆史的な視角よりは地域主義的で、郷土意識の

醸成に貢献するものの、ただ観光資源化の志向性は弱いという。ふるさとバーデンの場合、公共福祉事業が活動主体で、ハンブルクの様相とは異なる。ミュンヘンの事例[森2012]との検討は今後であるが、フェアラインの多様な表出のあり様が浮上した。ある意味で、文化行政や市民運動もナショナルに回収されず、住民本位に分散化する、それが社会-文化のかたちそのものだともいえよう。

(3)主調査地に選んだハンブルクが、ハンザ同盟以来の国際都市として移民や外国交流が盛んな地だったことから、エスニシティの問題も重視した。当地での日中韓の移住者の日常も研究に含み込んだが、中国系の人々のエスニシティ再構築に関し、例えば主に遠洋航海船乗組員が組織した「中華会館」の活動内容等を追跡調査した。定住者が40名程度だった1890年代には、専ら負傷で船員続行の困難になった者への職の斡旋や生活援助が主だった会館が、定住者が200名以上となる1910年頃から、ナチス政権時期の華人社会崩壊を挟み、戦後、活動をどのように拡張していくか、その変遷を把握する一方、現在彼らの直面している問題、例えば墓地管理や高齢者介護の現状調査を行った。5千人超の中国系に対し、日系2千人、韓国系3千人と人数は少ないものの、独居老人のケア問題など同じ課題を抱える。中国系は1994年に組織された長青会が定期的な訪問に加え、市やケア施設との交渉など、活動を拡張させていくが、これらも畢竟、フェアラインの精神と組織に支えられている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計32件)

岩本 通弥、日本民俗学の研究動向(2009-2011)・総論、日本民俗学、査読有、277号、2014、pp.6-14

岩本 通弥、世界遺産とふるさとブーム(下) ふるさと資源化がふるさとを疲

弊させる、倫風、査読無、64巻2号、2014、pp.22-26

岩本 通弥、世界遺産とふるさとブーム(上) 世界遺産は誰のためにあるのか?、倫風、査読無、2014、64巻1号、pp.22-26

Akiko MORI、Introduction:Exhibiting Cultures from Comparative Perspectives, *Special Issue Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe*, *Bulletin of the National Museum of Ethnology*, vol.38No. 4, 2014、査読有、pp.461-473

Akiko MORI、Exhibiting European Cultures in the National Museum of Ethnology, *Ibid*、査読有、2014、pp.475-494

島村 恭則、フォークロア研究とは何か、日本民俗学、査読有、278、2014、pp.1-34

及川 祥平、ハンブルク大学民俗学/文化人類学研究所における民俗学教育について、常民文化、査読有、37、成城大学常民文化研究会、2014、pp.1-26

森 明子、現代の民族衣装ディルドル、みんぱく e-news、査読無、140号、2013  
<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/140>

島村 恭則、フォークロア研究とライフストーリー、山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平 ライフストーリーの新展開』せりか書房、2013、pp.78-98

重信 幸彦、「都市伝説」という憂鬱、口承文芸研究、査読無、35、2013、pp.99-109

山 泰幸、中山間地における孤立集落の事前復興の取り組み 徳島県西部の事例から、災害復興研究、査読無、5号、2013、pp.11-14

山 泰幸、「遺跡社会学」の可能性、遺跡学研究、査読無、10、2013、pp.126-133

山 泰幸、韓国から見た東日本大震災 ド

- キュメンリー番組を中心として、関西学院大学災害復興制度研究所・高麗大学校日本研究センター共編『東日本大震災と日本 韓国からみた3.11』関西学院大学出版会、査読無、2013、pp.258 - 259
- 山 泰幸、物語としての人と自然、鳥越皓之編『環境の日本史5 自然利用と破壊 近現代と民俗』吉川弘文館、査読無、2013、pp.227 - 246
- 法橋 量、書評：河野眞著『フォークロリズムから見た今日の民俗文化』、日本民俗学、査読有、273号、2013、215 - 220
- 田村 和彦、ドイツ、中国における死の博物館をめぐって Museum Für Sepulkralkultur, Ohlsdorf 墓地付設博物館、上海殯葬博物館を訪問して、白山人類学、査読無、16号、2013、pp.133 - 137
- 門田 岳久・杉本 浄、運動と開発 1970年代・南佐渡における民俗博物館建設と宮本常一の社会的実践、現代民俗学研究、査読無、5号、2013、pp.33 - 49
- 門田 岳久、観光と巡礼、交流文化、査読無、14号、2013、pp.4 - 13
- 岩本 通弥、“都市民俗学”抑或“現代民俗学”？ 以日本民俗学的都市研究為例、文化遺産(中山大学中国非物質文化遺産研究中心)、査読有、19、2012、pp.111 - 121
- Akiko Mori, Japan, Bendix, R.F. & Hasan-Rokem, G. eds. *A Companion to Folklore (Blackwell Companions to Anthropology 15)*、査読無、2012、pp.211 - 233、
- 21 森 明子、手織り亜麻布のイニシャル刺繍入りシャツ、みんぱく e-news (国立民族学博物館) 査読有、129号、2012  
<http://www.minpaku.ac.jp/museum/eneews/129otakara>
- 22 重信 幸彦、声 のマテリアル 方法としての「世間話」・柳田國男から現代へ、日本民俗学、査読有、270、2012、pp.85 - 110
- 23 山 泰幸、「象徴的復興」とは何か？(ハングル)、日本研究、査読無、18、高麗大学日本学研究センター、2012、pp.63 - 81
- 24 田村 和彦、中山大学第2回青年人類学フォーラム：中国研究 自者と他者の視野、白山人類学、査読無、15号、2012、pp.139 - 142
- 25 田村 和彦、中国陝西省における食文化の創造 「農家楽」における食事を事例として、食生活科学・文化及び環境に関する研究助成 研究紀要(2010年度)財団法人アサヒビール学術振興財団、査読無、25号、2012、pp.81 - 90
- 26 田村 和彦 従“古風”的探求到我們的日常生活的研究、節日研究(中国)、査読有、6号、2012、pp.91 - 106
- 27 門田 岳久、日常/生活のなかの宗教 民俗 を越えて、高橋典史・塚田穂高・岡本亮輔編『宗教と社会のフロンティア：宗教社会学からみる現代日本』勁草書房、査読無、2012、pp.129 - 150
- 28 門田 岳久、佐渡 離島社会に生まれた宗教的風土、星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、査読無、2012、pp.46 - 49
- 29 岩本 通弥、オーラルヒストリーと『語り』のアーカイブ化に向けて 文化人類学・社会学・歴史学との対話、助成報告書(福武学術文化振興事業財団) 査読無、2011  
[http://www.fukutake.or.jp/science/assist/report/09/pdf/21rg1\\_iwamoto.pdf](http://www.fukutake.or.jp/science/assist/report/09/pdf/21rg1_iwamoto.pdf)
- 30 Akiko Mori、The Anthropology of Europe and its Extending Horizons、*Minpaku Anthropology Newsletter*、査読無、Vol.32、2011、p.15
- 31 重信 幸彦、ことばという素材 『橋浦家の女性たち』を読んで、Oral History Workshop News、Vol.19、2011、p.3
- 32 山 泰幸、民俗学の研究動向、年報・村落社会研究(農山漁村文化協会) 査読有、47号、2011、pp.248 - 259

〔学会発表〕(計 18 件)

岩本 通弥・山 泰幸、「介護民俗学」という問い 六車由美氏との対話(コーディネーター・趣旨説明・討論者)、現代民俗学会第 17 回研究会、2013 年 3 月 16 日、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)  
Akiko MORI、Making Exhibition of European Cultures in Japan: A Case of Minpaku 2012、*International Symposium Exhibiting Cultures: Comparative, Perspectives from Japan and Europe*、2013 年 3 月 17 日、National Museum of Ethnology(大阪府吹田市)

島村 恭則、台湾におけるクレオール現象と日本統治、日本海総合研究プロジェクト国際シンポジウム「世界のなかの日本世界のなかの日本語」(招待講演)、2013 年 12 月 8 日、富山大学人文学部五福キャンパス(富山県富山市)

重信 幸彦、知の実践のかたちとローカリティ 民族学という近代、国際シンポジウム「東アジアの民俗学 歴史と課題」、2013 年 11 月 9 日、京都大学時計台会館(京都府京都市)

島村 恭則、フォークロア研究とは何か 「民俗学」を再定義する、第 65 回日本民俗学会年会、2013 年 10 月 13 日、新潟大学五十嵐キャンパス(新潟県新潟市)

山 泰幸、震災と日本人論 和辻哲郎をめぐって(招待講演)、韓国高麗大学校日本研究センター、2013 年 3 月 9 日、高麗大学校(韓国ソウル市)

田村 和彦、「非遺」時代的自文化研究 日常生活的記録與「異化」的日中比較、中国社会科学院民族学人類学研究所・国立民族学博物館共同開催国際学術研討会「中日人類学民族学理論創新與田野調査」、2013 年 11 月 19 日、中国社会科学院民族学人類学研究所(中国北京市)

田村 和彦、世界遺産/無形文化遺産時代

の文化と社会をめぐる現状と展望(趣旨発表・コーディネーター)、福岡大学・東アジア地域共生研究所主催「世界遺産/無形文化遺産時代の文化と社会をめぐる現状と展望」、2013 年 10 月 21 日、福岡大学中央図書館多目的ホール(福岡市)  
門田 岳久、宮本常一と幻の日本海大学 『生活』を学ぶ若者たち(招待講演)、シンポジウム「宮本常一と鬼太鼓座の時代」、2013 年 8 月 23 日、佐渡国小木民俗博物館(新潟県佐渡市)

岩本 通弥、民俗学と市民運動 柳田國男とその弟子たち(招待講演)、長野市民教養講座「近代日本の動揺」、2012 年 11 月 9 日、メトロポリタン長野(長野市)  
岩本 通弥・門田 岳久、民俗学的 技法の構築を目指して 方法としてのナラティブ(シンポジウム・コーディネーター・趣旨説明・司会)、現代民俗学会 2012 年度年次大会、2012 年 5 月 26 日、成城大学 3 号館(東京都世田谷区)

岩本 通弥・門田 岳久、民俗学・口承文芸学におけるオーラリティ研究の展開 教育大系統の民俗学を相対化する(コーディネーター・趣旨説明・司会)、現代民俗学会第 13 回研究会、2012 年 4 月 14 日、東京大学東洋文化研究所(東京都文京区)  
森 明子、民俗学実践のかたち ミュンヘン協会の変遷を事例として、国立民族学博物館共同研究「日本におけるネイティブ人類学/民俗学の成立と文化運動 1930 年代から 1960 年代まで」、2012 年 12 月 25 日、国立民族学博物館(吹田市)  
森 明子、ベルリンのキンダーラーデン運動について 1980 年代から 21 世紀初頭へ、日本文化人類学会第 46 回研究大会、2012 年 6 月 24 日、広島大学(東広島市)  
山 泰幸、日本における文化研究の動向と争点 社会的観点から(招待講演)、韓国文化研究学会、2012 年 11 月 24 日、聖公

会大(韓国ソウル市)

山 泰幸、文化遺産を活かした魅力あるまちづくり(招待講演) 扶余郡文化財保存センター、2012年6月12日、扶余ロッテリゾート(韓国扶余市)

田村 和彦、葬儀を具現化する人々(2) 中国内陸部殯儀館における火葬職員の仕事を事例として、日本文化人類学会第46回年次大会、2012年6月24日、広島大学(広島県東広島市)

岩本 通弥、都市民俗学の可能性 日本民俗学 30年余の経験をふまえて(招聘講演) 第1届城市社会論壇 城市化与城市生活国際学術会議、2011年10月21日、中国上海・華東師範大学

[図書](計10件)

森 明子編、ヨーロッパ人類学の視座 シリアルなるものを問い直す、世界思想社、2014、289

Elmer VELDKAMP、*Highlights from the Korea Collection of Rijksmuseum Volkenkunde*、2014、Stylus、KIT、110

岩本 通弥編、世界遺産時代の民俗学 グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較、風響社、2013、418

岩本 通弥、グリンデル高層住宅 団地暮らしの映像民族誌的接近(マイケ・ミュラー監督/日本語版 DVD)、2013、東京大学大学院総合文化研究科、83分、解説16

Akiko Mori (ed.) *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social*、2013、国立民族学博物館、198

島村 恭則編、引揚者の戦後、2013、新曜社、398

崔在穆・山 泰幸・全成坤、イメージとしての文化共同体(ハンゲル)、2013、人文社(韓国) 341

門田 岳久、巡礼ツーリズムの民族誌 消

費される宗教経験、2013、森話社、400  
岩本 通弥・菅 豊・中村 淳編、民俗学の可能性を拓く 「野の学問」とアカデミズム、2012、青弓社、269

山 泰幸・足立重和編、現代文化のフィールドワーク入門、2012、ミネルヴァ書房、273

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岩本 通弥 (IWAMOTO, Michiya)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号: 60192506

### (2) 研究分担者

森 明子 (MORI, Akiko)  
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授  
研究者番号: 00202359

重信 幸彦 (SHIGENOBU, Yukihiro)  
国立歴史民俗博物館・研究部・客員教授  
研究者番号: 70254612

法橋 量 (HOKKYO, Hakaru)  
慶應義塾大学・文学部・非常勤講師  
研究者番号: 40634192

山 泰幸 (YAMA, Yoshiyuki)  
関西学院大学・人間福祉学部・教授  
研究者番号: 30388722

田村 和彦 (TAMURA, Kazuhiko)  
福岡大学・人文学部・准教授  
研究者番号: 60412566

門田 岳久 (KADOTA, Takehisa)  
立教大学・観光学部・助教  
研究者番号: 90633529

島村 恭則 (SHIMAMURA, Takanori)  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号: 10311135 (2013年度から)

松田 睦彦 (MATSUDA, Mutsuhiko)  
国立歴史民俗博物館・研究部・助教  
研究者番号: 40554415 (2013年度から)

### (3) 研究協力者

及川 祥平 (OIKAWA, Shouhei)  
成城大学・グローバル研究センター・研究員

エルメル フェルトカンプ (VELDKAMP, Elmer)  
ユーレヒト(Utrecht)大学(オランダ)・Roosevelt College 社会科学部・専任講師